ベトナムにおける養豚の新展開

ベトナムの農業は、1986年に始まるドイモイ（刷新）政策の下で成長過程に入り、以前の食料不足の状態から脱却して、米、コーヒー、ゴム、コショウなどでは世界市場における主要輸出国の一つとなるに至った（注1）。そして畜産においても、これら輸出品目ほどの伸びはないにしても、生産は拡大を続けてきている。

特に養豚については、ベトナム政府はその近代化と輸出産業としての成長を期待している。そして実際にも、ベトナムにおける養豚は、近年、大きな新しい動きがみられている。本稿では、これらの動向について、現地の事例も含めて考察することとしたい。

（注1）石田（2006）参照

1　ベトナムの畜産と養豚

ベトナムの畜産は1990年代以降順調に拡大を続けており、特に、養豚と養鶏の伸びが著しい（第1表）。なかでも、養豚はベトナムの食肉生産の約8割を占めており、ベトナムの畜産の主柱となっている（第2表）。

経済の発展に伴う所得の向上は豚肉への需要を増加させ、生産の増加はほとんど国内消費に振り向けられている。

各国の豚飼養頭数を比較すると、ベトナムは中国（489百万頭）、アメリカ（60百万頭）、ブラジル（33百万頭）に次ぐ世界第四位（27百万頭）の大生産国である（2005年。FAOSTAT。以下、ドイツ27百万頭、スペイン25百万頭と続き、日本は10百万頭で世界第15位である）。

ベトナムの養豚産業構造について、Ma.

第１表　ベトナムの家畜飼養頭羽数の推移

（単位　千頭・羽）

	1990	1995	2000	2001	2002	2003	2004	2005
牛	3,117	3,639	4,128	3,900	4,063	4,394	4,908	5,250
水牛	2,854	2,963	2,897	2,808	2,814	2,835	2,870	2,950
豚	12,261	16,306	20,194	21,800	23,170	24,885	26,143	27,000
家禽	107,400	142,100	196,100	218,100	233,000	247,010	218,233	245,000
山羊	372	551	544	572	622	780	1,023	1,200

資料　FAOSTAT

第２表　ベトナムの食肉生産量の推移

（単位　千トン）

	1990	1995	2000	2001	2002	2003	2004	2005
牛	75	83	92	98	102	108	120	121
水牛	89	97	92	97	99	100	101	103
豚	729	1,007	1,409	1,515	1,654	1,795	2,012	2,100
家禽	170	176	365	386	420	456	405	388
山羊	3	4	5	5	5	6	8	9
その他	13	17	19	17	18	17	18	19
食肉合計	1,079	1,384	1,982	2,118	2,298	2,482	2,664	2,740

資料　FAOSTAT

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

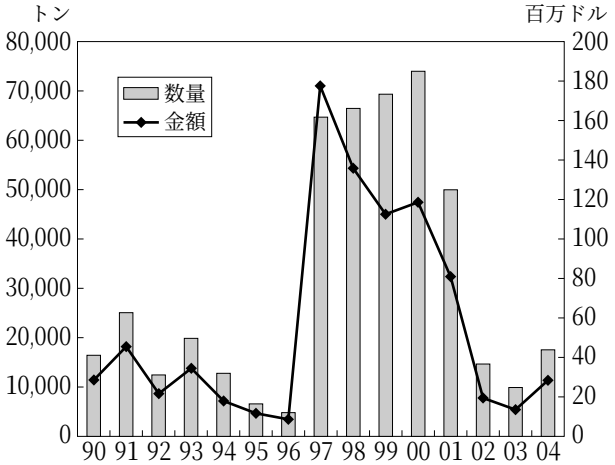
Lucila Lapar他（2003）は、以下のとおり四つの形態に分けて整理している。

第一は、国営農場であり、シェアは4～5%である。品種改良と技術普及に重要な役割を果たしている。第二は、民間商業生産農場であり、シェアは約15%である。繁殖雌豚5～100頭、肥育豚10～500頭を飼育。ホーチミン市周辺に展開している。第三は、小規模な農家養豚であり、シェアは約80％を占める。繁殖雌豚1～2頭、肥育豚10頭以下の規模で、全国的に見られる。第四はインテグレーションであり、最近発展している。外国資本が投資し、20～200千頭規模で、ホーチミン市で発展がみられる（注2）。

地域別の特徴をみると（第3表）、第一には、紅河デルタが全国の約四分の一を占めており、その割合が高いことがあげられる。紅河デルタにおいては、現金収入を得るために農家が1～2頭規模で豚を飼養することが伝統的に広く普及しており、これに近年の多頭飼育の拡大も加わり、増加を続けている。第二には、養豚はこのような特徴を持ちつつも一部地域に集中して行われているのではなく、全国的な展開がみられることがあげられる。他の作物の場合、最も一般的な米においてもメコンデルタと紅河デルタの両地域で全国生産の約7割を占めており、その他の商品作物においては一層大きな地域的偏りがみられるが、養豚はこれら作物と比較して地域的偏りが小さく、また各地域ともに生産の拡大がみられる。第三に、近年生産の拡大が最も著しいのはホーチミン市を擁する南東部であり、これは、大消費地向けの商業生産の拡大の結果とみられる。

次に、食肉の輸出入をみると、豚肉のみが増減はあるものの輸出が継続的に行われている（第1図）。ベトナムの養豚は、購入飼料

第１図　ベトナムの豚肉輸出の推移



資料　FAOSTAT

第３表　ベトナムの地域別豚飼養頭数

（単位　千頭）

	1995	2000	2004	シェア	04/95
紅河デルタ	4,279	5,399	6,898	26.4	1.61
北東部	2,869	3,510	4,391	16.8	1.53
北西部	729	868	1,176	4.5	1.61
北中部海岸	2,637	2,944	3,852	14.7	1.46
南中部海岸	1,501	1,725	2,221	8.5	1.48
中部高原	783	1,123	1,489	5.7	1.90
南東部	1,132	1,650	2,403	9.2	2.12
メコンデルタ	2,377	2,977	3,714	14.2	1.56
合計	16,306	20,194	26,144	100.0	1.60

資料　ベトナム統計総局

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

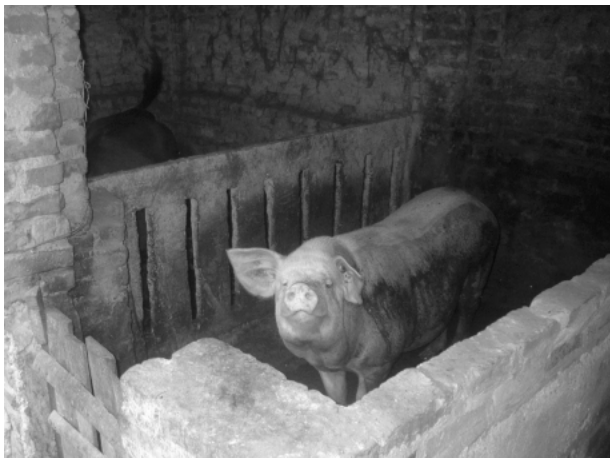
コストが高く、品質もよくないことから、海外の安定した市場を獲得するには至っていない。また、口蹄疫が発生していることも、大きなネックである。

（注2）Ma. Lucilia Lapar他（2003）“Identifying Barriers to Entry to Livestock Input and Output Markets in South Asia” FAO

2　ベトナムの養豚の問題点と課題

上述のとおり、ベトナムの養豚の大半は零細な複合経営農家によって担われているが、これらの経営においては、農家の家屋に豚小屋が併設されたり（第2図参照）、養魚池近くに豚小屋が設けられることが多い。そして、糞尿も含めた資源の循環利用により低コストで現金収入を得る手段になっている。しかし品種は在来種や混合種が多く、これらの品種は肥育効率が悪く、また、脂身が多いため最近の消費者の好みに合わないことが大きな問題である。

第2図　ハノイ近郊零細複合経営農家の豚舎



次に、屠畜・食肉処理および流通機構の未整備と後進性の問題が指摘される。輸出向けの豚肉は、VISSANに代表される国営企業の流通チャンネルができているが、国内需要向けの分野では、生豚は多くの場合スローターと呼ばれる屠畜業者に直接、あるいは集荷人を通してスローターに販売される。また、都市近郊では、生産者がバイク等で直接都市の市場に運搬して販売するケースも少なくない。スローターは農家から買い入れた豚を村の路上で屠殺・解体するのが一般的であり、衛生面での問題を抱えている。屠畜業者の登録制度もないし、これらに対するモニタリング制度もない。また、消費地側においても、近代的な市場が未整備であり、低温流通体系についても同様である。

ベトナム政府は、養豚については今後一層の拡大を目指しており、輸出も2004年の17千トンに対し2006年～2010年においては年間25～30千トンの輸出を目標としている（注3）。しかし、輸出はもちろん、国内の需要に適切に対応するためにも、ここにみたような問題を解決するために、優良品種の普及から農場施設の改良、屠畜・食肉処理および近代的な流通機構と制度の確立に至るまでの、一貫したインフラ整備をすすめることが、大きな課題といえる。

（注3）2006.7.29付Viet Nam News

第3図　ハノイ近郊V村の大規模養豚農場

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

3　新しい養豚の動き

ベトナムの養豚の現状からみると、今後の養豚の拡大を担うのは、商業的生産農場やインテグレーションなどの大規模経営体であるとみられる。ここでは、昨（2005）年11月にハノイ近郊を訪問した際の事例を紹介したい。

ハノイから車で南東に1時間のところに位置するＶ村は、果樹、野菜、養豚が盛んで、米作りをやめてしまった珍しい村である。1990年代に入り、村の指導で条件の適した果樹生産への特化がすすんだが、一方養豚も盛んに行われ、果樹と養豚の複合農家が多く生み出された。そして、2000年代に入ると多頭養豚農家が増加し、全農家の約四分の一が養豚専業農家になっている。

訪問したＡ氏は、果樹と養豚の複合経営である。2000年時点では豚は8頭を飼育するのみであったが、2001年以降大規模養豚に取り組み、現在では繁殖豚100頭を飼育し、子豚・肥育豚合わせて年間1,500～2,000頭を出荷する村最大の養豚経営となった（第3図参照）。周辺の農家から農地を購入して規模を拡大し、7名を雇用している。飼料はカーギル社の輸入飼料を用いており、カーギル社のコンサルティングも受けている。

同じ村で訪問したＢ氏は、2001年に養豚を開始し、現在は繁殖豚60頭を所有する。子豚は一部を残し他の農家に販売している。Ｂ氏は2haの大型の養魚池を所有しており、糞尿はそこに流すことで、効率的な資源循環と収益確保を実現している。

このように、わずか数年で大規模な経営を築いてしまうところに、ベトナムの農民の潜在的な能力の高さを大いに感じさせられる。この村の場合は、ハノイに近いこと、村の指導がよく行われていることなどがよかった点であると思われ、また、農民組合（“Farmer's Union”）も農業情報や資材・資金の提供等において一定の役割を果たしているようである。外国資本による大規模なインテグレーションに加え、このような農民の中から成長する養豚経営も、今後のベトナム養豚の強い牽引車となろう。

しかし、この村の農家の生豚販売先は、村内のスローターとハノイの業者が半々であるとのことであった。先にあげた、販売後の流通過程の問題は、この村にとっても例外ではない。

今後、政府はこのような大規模養豚経営の育成のための取組みを進めていくと思われるが、一方では、それは小規模な養豚複合経営にとっても改善につながるものでなければならないであろう。すでにみたとおり、ベトナムの養豚の大半はこれら零細な農家によって担われている。ベトナムにとって農村の過剰人口と貧困を解消することが大きな目標となっているが、そのためには、貴重な収入源となっている養豚産業のネックを取り除くための全般的なインフラ整備が、困難ではあるが避けて通ることのできない課題である。

（石田信隆）

＜参考文献＞
・長憲次（2005）『市場経済下ベトナムの農業と農村』筑波書房
・石田信隆（2006）「WTO体制下に入るベトナム農業」（『農林金融』8月号）
・Ma. Lucila Lapar他（2003）“Identifying Barriers to Entry to Livestock Input and Output Markets in South Asia”
・P. Moustier他（2003）“Food Markets and Agricultural Development in Vietnam”

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。